

CRIMSON COLOR COMICS



J-GIRL.FIGHT



「くそっ…誰よアンター！」
「忘れたかな？」
「まあ覚えてないか…。」
「三年も前のことだしな。」
「お前は私の船から
1000万ペリーもの
大金を盗んでいったんだ。」
「さよ知らないわね。」
「アンタみたいなのが又ケな奴
山ほどいたから
いちいち覚えてないわ」



「まだそんなこという
余裕があるんだな」

「あうっ！」

（くっ…おかしい…）

こんなヘタクソな責めで
気持ちよくなるなんて…！

「ほらほら声も体もが
震えて来たぞ。」

おまけにゴコは…！

「あああっ！」

「ほらこんなグチュグチュだ」

「卑怯者…！」

どうせクスリでも
使ったんでしょ！」

「フフフ…」

お前に卑怯者扱い
されたくないな」



かつて手玉にとった
矮小な男に
もてあそばれることが
嬉しくてたまらないナミ。
「くそっ……や……めっ……あああっ！」
「そっうそっう」
そっういう声が聞きたかったんだ。
三年間たまりにたまった
うっふんをお前の体で
はらさせてもらおうじゃないか。」
「ああっ……くっ……」



完全に身動きができないように縛られて、丹念に媚薬を塗りこまれていく。「小賢しいお前でももう今度は何もできまい」男のたまりにたまっていた欲望は、そう簡単にはおさまるものではなかった。いたぶり続けて2時間以上経つが、いっこうにおさまる気配もなく、それどころが、徐々にガマンできずに色っぽい声もちらすナミにますます興奮し、さらにねちっこく責めを重ねていく。



ナミの体は信じられないほど熱くなっていった。
「くっ……おねがい……許して……」
盗んだお金だったら返すから……」
「ダメだな。いまさらもう遅い。」
あのとさワシが受けた屈辱は
金を返したくらいではおさまりきらん。
お前はもう一生ワシの肉奴隷に決定だ」
「そ……そんな！」



「肉奴隷としてます
一発目を受けとれい！」
「ああああああああああっ！」
「この三年間
もしお前を捕まえたなら
どういたぶってやろうかと
100通りくらい
考えていたからな。
毎日毎日いたぶってやるぞ。
たのしみになっている」
「あああああああ
ああああああああっ！」



低い振動音が聞こえてきた。それと同時に、胸の先にその振動を感じるリンス。
リンス「な、何……これ？ えー？」

男「お目覚めかね、リンスレットロウカー」

リンス「誰？ 何よこれ？ どういうこと？」

男「見ての通りだが、説明して欲しいかね？」

そこは見知らぬ部屋だった。ベッドに轉り付けられ、身動きが取れない。

リンス「……これ以上おかしなことにしたら、訴えてやるから！」

男「キミが警察に行けるわけがないだろう……ああ、あったあった」

男は、冷静な顔つきのまま更に道具を取り出す。

それは、男性器を模したパイプレーターだった。

リンス「ひっ……やめてよー 何するのー？」

男「もちろん、キミの愛らしい膣に挿入する以外の使い道はないね」

リンス「やだっ！ ちよっと……んあっ、やめてまっ！」

男はリンスの股を押し開き、陰部にパイプをあてがう。

ヴァギナはまだ異物を受け入れる準備ができていなかったが、

男に手抜かりはない。パイプにはたっぷりとローションが塗られていた。

男「さあ、啜え込んでくれたまえ」

リンス「痛っ！ はっ、入るワケないでしょー？ やっ、やめ……」

んあああああー！」

膣をこじ開けて入ってくるパイプに感觸に、リンスは快樂よりも

痛みと恐怖を覚えた。

ほぐれていない膣道は、ただ圧迫感だけを伝えてくる。

リンス「っかは、はあ、はあ……んぐー！ ぬ、抜いて、抜いてよお……んくうー！」

男「なに。すぐに氣持ちよくなる……ほら」

男がパイプのスイッチを入れた。乳首を襲う振動よりも激しい振動とうねりが、

膣内狭しと暴れ出す。

陰核部分にも刺激を与えられるよう設計されたそれは、痛みと同時に

快樂も与えるようにできていた。

リンス「あがっ、くっ、んあああー！ いっ、ひぐー！ 痛い、つくうううっ！」

男「ああ、痛みに至む顔も美しいね……ずっと、その顔を見たいと思っていたよ」





リンス「ああ、な、なんなのよ……」

「あんた、いったいなんなのー!？」

男「キミのファンキさ。ずっとずっと、」

「欲しいと思っていたんだよ……キミのすべてをね」

リンス「ふざけたことを……っくううー」

「あんたなんかにはやれる物は、ひとつもなっ……」

「んあっ、はあ、はあ……ないわー!」

男「その気丈など、ころも素敵だよ……」

「さあ、腹だけではなく、尻の方にもあげようか」

リンス「なっっ!？」 やめっ、やめてよおっ!」

リンスの懇願に耳を貸さず、

数珠繋ぎになっているパールを肛門に押し込んでいく。

リンス「あが……っく、あ。入る。お尻の中、」

「いっばい……ああ、入ってくるううー!」

男「美しい女性は肛門までもが美しい。

私の目に狂いがなくて嬉しいよ」

リンス「やめて。も、もう入れないで……」

「苦しい、っく。んん、んうあああああ」

「直腸にパールを押し込められる。

それは振動を伴わないが、

膣内で蠢いているパイプが粘膜の

皮一枚隔てた先からパールを揺すった。

リンス「抜いて、こ、これ、抜いてえー」

「こんなの、おかしくなる……」

「私、駄目になっちゃうっ!」

男「いやいや、キミなら大丈夫さ……」



男「これから商談があつてね。少し席を外すが……
なに。寂しくないように、私のペットを

置いていくから安心してくれたまえ」
リンス「ペット？ なによそれ、

その前にこれ外していきなさいよ！？」
男「それはできない相談だ……」
そのかわり、目隠しをしていてあげよう」

リンス「意味が分からないわー？」
半狂乱の悲鳴をあげるリンスに、

男は微笑みながら目隠しをする。
男「それでは、存分に楽しんでいてくれたまえ」

リンス「いやー！ 怖い、何ー？
なんなのよおっつー！」
フッフッフー」

リンス「ひいっ！ な、何？ 何がいるの！？」
荒い鼻息が聞こえてきた。

そして、ベッドに登ってくる。
目隠しをされたままのリンスには

分からないことだったが、
それは大型の雄犬二匹であった。

リンス「こら、来ないで！ 来るな！
あつ……きゃあつー！」

犬「ハッフッフッフ」

犬たちは慣れているのか、
リンスの叫びにもたじろぐことなく近寄り、

その素肌を舐め始めた。
リンス「きゃああつー！ 何ー？

やだっ、犬ー？ 嘘っ！ やめてっー！
柔らかく旨そうな脇腹を、

肉の詰まっついでいそうな太ももを。頬を、首筋を、
乳房を、足先を舐め回す犬たち。

リンス「いやっ！ こんなイヤあああああー！
目隠しをされたことで、犬たちの行為を

肌で感じるリンス。ざらついた舌に
身体中を愛撫されて身をよじるが、

犬たちは舐めるのをやめようとしな。い。
リンス「ああああ、あ、あ……」

いや、誰か、助けて……」



リンス「あっ、あぁぁー 来るっ、
また来るぅー！」

男「はぁ、はぁ、いいですね。
それでは、私も一緒にイかせて
いただきますしゅうかー！」

リンス「来て……来てっー！」
男「そおですー！ もっと懇願しなさいっー！」

リンス「いいわ。もう、いい……中を出してー！
私のマ●コの中に、あなたの

精液ぶち込んでっー！」

男「おおお、お、お、お、おおっー！」
リンス「来てっ、来てえ……イかせてえっっー！」

男が激しく突き込んだのと同時に、
膣内が熱いもので満たされていく。

リンス「あ——っっっっっー！」
まるで犬のようなうなり声を発し、

何度も何度も腰を打ち付けてくる男。
その精液が膣内を、さらには子宮にまで

染み込んでいく。

リンス「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……
んぁぁ、妊娠……しっちゃ、う……うう！」

男はペニスを抜かず、また体勢を立て直す。
男「どうせなら、確実に妊娠するまで

注ぎ込んであげましょう……
もちろん、あなたもそうして

もらいたいハズですよねぇ？」

リンス「……は、はい……お願ひします」
リンスにはもう、懇願する以外の道はない。

リンス「妊娠するまで、精液を注ぎ込んで
ください……イかせてください……」

男「仕方ありませんねえ……ふははははっっー！」
男の哄笑にももう、何も感じることはなかった。



碎蜂「なっ、なんなんだ貴様たちは！ 放せー」
女「なんなんだ、はないでしょ？」

せっかく可愛がってあげようと思ってるのに」

碎蜂「何が可愛がるだ！」

私を誰だと思っているー！」

女「だからあ、碎蜂でしよう？」

私たちと同じ、レスビアンなのよ」

碎蜂「なー？ ああ、

どっ、どこを触って……ンンッ！」

薄手の装束であるのをいいことに、

女たちは碎蜂の肌の手を伸ばしてきた。

服の隙間から手を入れ、

初手から容赦なく臀部を責める。

碎蜂「こっ、この痴れ者どもが！

誰がレスだ、誰がっ！」

女「あら。だってあなた、

先代様に魅惑していたんでしよう？」

女「ええ、有名よ。あなたが夜一様に

付き従っていたのは、夜のお供も

していたからだって」

碎蜂「私には、いや、夜一様にも、

そのような趣味はない……っ！」

女「またまた。そんなこと言って……

コフは正直よ？」

碎蜂「んっく！ よせ！

そんなところを触るな……

んんっ、くふ。んくうっ！」

一人はあまり肉厚のない愛らしい乳房を、

その先端の乳首をくすぐり、掻み上げる。

一人は股間へと手を伸ばし、

下着の上から女性器を撫で回す。

もう一人も同じく股間へと指を這わせ、

にやにやと舌なめずりをしていた。

女「とにかく、せっかくだもの。

一緒に楽しみましょうよ」



女「……、そろそろ脱ぎ脱ぎしてしま……
砕蜂「や、やめろ……」

私にその趣味はないと………
女「はい、この間様く〜」

女「あはは〜 可愛いおっぱい〜」
砕蜂「んく〜 っ〜 よっ、よせ、そこは……」

女「あら、もう濡れてるんじゃないか……」
女「私たちの愛撫で感じてくれたら……」

砕蜂「くそ、くっ……んんん〜うー
触るな……っ〜」

女の指が、砕蜂の一番敏感な部分……
下着の隙間から指を透わせ、

なつとりとした感覚を与えながら……
砕蜂「ひゃっ〜 あ、っく、そ、そこは……」

貴様たちのような者が触れて……
ああん〜、く〜っ、んん〜

女「私たち以外の誰が触れるのよ、
どっせ男に興味ないんでしょ？」

砕蜂「馬鹿なこと……んん〜、く〜、男……
女が陰核の世話をめくり上げる

刺き出しになった粘膜の小柱が下……
砕蜂の淫歌に衝撃を走らせた、

女「おっ、染み出てきた染み出て……」
砕蜂「あ、……、駄目だ、そんな

女「お尻と張りがあつて羨ましい、……
……前門も、キョッとして可愛……」

砕蜂「あ、あ、あ、っ〜」
女の指が、肛門に触れた。そして

突っ込まんばかりに押し出されて……
砕蜂「やめろっ〜 そんなところ……

っ〜、あ、お、お尻はっ〜」
女「あら、お尻が性感帯？ 可愛い

砕蜂「遠〜、く……んん〜、ひあ〜
触る、な……んん〜あ、っ〜」

乳房を弄っていた女も、股間を……
負けないようにと刺激的な攻めを……

全体を荒々しく揉みほぐし、尖……



碎蜂「つくはあ、はあ、はあ……ああ。も、もう……」

女「ああ、ごめんなさい。いつまでもくすぐるばかりじゃいけないわよね」

女「はあ。それじゃ、脱ぎ脱ぎしましよ」

碎蜂「ああ……駄目。み、見るな……やめろ……ああ」

下着がはがされる。同時に、秘部に溜まっていた愛液が滝のように流れ出した。

女「ふふふ、凄いや……いい匂い。素敵な愛液だわ」

女「こんななたっぷりで。ほら、もうおまんこユルユル」

碎蜂「あぁっ！ や、ひゃー！ 触るな、指を、ああ、指を入れるな……あああー！」

碎蜂の尻を高く上げさせ、女性器を視姦する女たち。

しかしすぐに見るだけでは物足りなくなり、指を這わせ、舌を伸ばす。

碎蜂「あぐっ、くう……んうう！ こ、こんな屈辱的な格好……許さぬ、許さぬぞ」

女「あら。まだ強がれるのね。さすがは二番隊長様だわ」

女「でも、嫌がる子を無理矢理イカせるのも楽しいわよね……べろっ」

碎蜂「やめろ。口づけなど……んじゅっ、つぶぶ。んん、ちゅぶ、ぶっ、んうう」

重ねられた口から唾液を流し込まれる碎蜂。その息苦しさに眩暈を起こしたかと思うと、陰部からの刺激で覚醒する。

女「見て、このおまんこ。ヒダヒダも少なくて、とっても綺麗」

女「お尻だって、キョッとするほど可愛いわよ。ほら、指一本でもキツキツ」

碎蜂「んぐっ！ じゅぶう、ちゅ、んう、うううっ！」

腹に、直腸に、指が挿入された。押し込まれた指が内部で轟く感覚に、碎蜂は憎悪と快感をない交ぜにする。

碎蜂（許さん許さん許さん許さん……あああああぁっ！）

陰核を揉まれ、全身に官能の電撃が走り回る。

陰毛を引っ張られ、こぼれゆきに身をくねらせる。

碎蜂（私は、こんなことで屈したりしない。感じたりなど、しない……っ！）

舌を吸われ、唾液を吸われ。乳首を抓られ、乳房を揉まれる。

碎蜂はそれでも屈しまいと抵抗する。しかし心とは裏腹に、身体はすでに快楽の虜となっていた。









乱菊「……くっっー 放せー」

放しなさいと言っているのよー」

男「いやなこった。せつかく性れの乱菊さんを」

撫まえられたんだからな」

男「そっす。その巨乳。たまっねよ」

後ろ手に縛り上げた乱菊を羽交い縛りにする。

その手は、早くも乱菊の乳房を揉みしだいていた。

男の攻めは、最初から乱雑であった。

愛撫などという優しいものではなく、

ただひたすら己の欲望を満たすだけの行為。

その豊満すぎる乳房を揉みほぐすのではなく、

鷲づかみにする。乳房を振り、

積み上げてその感触を楽しむだけ。

乱菊「痛っ……んっ、放しなさいー。っく、うんー」

男「くはー。デカくて柔らかくて最高のな」

乱菊「やめろと言ってるのよー。っく、構むな」

……んっく、あうー」

男「デカいくせに敏感か……」

ますますたまらねえぜ」

男「お、俺にも揉ませろよ」

前に立った男たちは、乱菊の顔よりも

乳房を見つめながら喋っていた。

その獣じみた息づかいが、乱菊に嫌悪感を走らせる。

男「くくく……買ってるのかよ」

可愛いところもあるしやねとか」

乱菊「くっ、も、もういい加減に……」

さっさとあめあー」

男「へへ、声もたまらねえぜ、乱菊ちゃん」

乱菊「んん……くっ」

乳房ばかりを責め立てるその行為に、

乱菊はマゾヒスティックな快楽を覚え始めていた。

乱菊（違う……あたしは、こんなゴトで……）」



わざと乱暴に衣服をはぎ取る男たち。

たわわな胸が、張りのある腰が、その前にさらけ出された。

男「ヒューー！ 見ろよ」

。護廷十番隊副隊長殿の素っ裸だぜえ！？」

乱菊「あんたら、それが分かっていて

こんなコトをしてるの！？」

あたしが本気で怒らないうち……」

男「無駄無駄。新魄刀もない。鬼道も

使えない状態のあんたにゃ、何もできやしねえよ」

男「俺たちに犯されること以外にはな！くははっ！」

乱菊「くっ……」

手を縛られているだけではない。

身体の自由が利きにくいのは、何か薬でも盛られたか、

それとも縛道か。

乱菊はまだ自由の利く目に、怒りと憎悪を乗せる。

しかし、男たちはその視線にさえも欲情していた。

男「おお、怖い怖い……でもよ、

いくら怖い顔したところで、

素っ裸じゃ余計にソッソるだけだっ……」

男「でもよ、

すぐにそんな目すらできないようにしてやるぜ」

乱菊「なっ！ はっ、放しなさい！」

両脇から取り押さえられ、持ち上げられる乱菊。運ばれた先にあったのは、三角木馬であった。



乱菊：「あっ！ いやっ、

ああああああああっ！」

吊し上げ、木馬をまたがせる。

暴れる脚を押さえることなど

赤子の手をひねるようなものだった。

男：「おほーっ。割れ目にびったり

と食い込んでるぜ」

男「こりゃあ、

たまらねえ見せ物だな、くははっ！」

乱菊「こ、このあたしにこんな……っ

く、今すぐ下ろしなさい！」

男「あんたのその気の強さが、

いつまでもつか楽しみだぜ」

乱菊「フン。この程度の責めで、

あたしが屈服するとても

思ってるの？」

男「くくく……それじゃあ、

これでどうだい？」

乱菊「え？」



男がスイッチを入れると、木馬が振動し始めた。低い振動音が狭い石壁の部屋に響き渡った。

乱菊「へな？、何よこれー！ こんなに……んっく、すごい、し、痺れる……」

男「お楽しみはこれからだぜ」

乱菊「あああッー だ、駄目。食い込む……んっ、くっ！ー くは、はぁ、はぁ！」

動けば動くほど、自らの重みで木馬が食い込んでくる。

乱菊の官能を激しく震わせた。

乱菊「きゃっ、うあッー だっ、駄目……いや、これっ……あああああッー！」

男「気に入ってもらえたようだな」

乱菊「っくうー！ 馬鹿な、こと……いっ、言わないでっ！ー あ、あッ……」

もっとも敏感な部分を襲う振動が波を打った。同時に、乱菊の腰があまりの官能に揺れ上がる。

男「振動の強さも変えられるんか。なかなかオツなもんだらう？」

乱菊「あッッ、ソッ、くうッー！ うう、こ、この程度で……んんんッー！」

男「さすがに粘るねえ……それじゃあ俺たちが手伝ってやるよ」

乱菊「え？ な、なにを……やめな……男「へへへ。乱菊さんの素肌よ」

乱菊「やめる。触るなっ……くは……身動きの取れない乱菊に男たちがまじわりな……たわわな乳房を、そそり立った乳首を……三角木馬に割られている股間や尻を……男たちは舌なめずりしながら撫で廻す。



乱菊「ああ、はあ、はあ、さ、触るな、い、今、触られたら……んんっ、ふあああッ」
男「おやあ？ どうかしたんですかあ？」
男「乱菊さんほどの人が、責められて感じちまってるんですかあ？ くははっ！」
乱菊「くっ……そんなコト、な……ンンッー や、やめる……あああ、つくああ」
男「くくくっ、このデカパイ、最高だぜ。乳首もこんなにツンツンでよお」
乱菊「きゃうっ、くっ！ 引っ張らないでよ、ああ……とっ、取れるうー！」
男「おっと。それじゃ、優しくしてやるよ……じゅるるっ！」
乱菊「ひっ、ひゃふ、あっー！ な、舐めないで……胸、感じすぎて……あああ、ひあ」
陰部を襲う振動の波。尻を撫で回され、乳房をしゃぶられる。
全身からの快感に乱菊はまた官能を強め、下腹部を熱くする。
息を荒げ、こそばゆさと快楽に肌を震わす。

乱菊「はあ、はあ、はあ……こ、こんな……んんっ……あたしが……」

男「身体の欲求に正直になれよ。ほら、もうこんなに濡らしてやがるんだからよ！」

乱菊「ひっ！ ひあああああああー？」

乱菊を押さえ込み、尻穴から会陰までを剥き出しにする。ぱっくりと割れたヴァギナは、三角木馬の振動に晒されたままだ。

男「じゅるるっ、ちゅぶっ！ へへ、いいケツ穴だぜ」

乱菊「やめっ！ そんなコト、あ……んあああ！ 駄目、そこは、あああっ！」

男「れろれろ、べろん！ じゅっ、じゅるる……ちゅぶっ！」

乱菊「ひっ！」

肛門に舌を突き込まれ、羞恥と官能に息を呑む。乱菊は自らのうちに込み上げる欲情を抑えられなくなっていた。

乱菊「あはっ、ふっ……くうー！ クソ……し、痺れる……ああ、ふああ、はあ」

男「ケツ舐められて感じてるのか。乳のでけえヤツはみんな淫乱だよな」

男「だから俺たちも楽しませてくれるんだろ？ ありがたく思わなくちゃ！」

男「違う……くはは！」

乱菊（くう……こ、こんな。あたしが、こんな奴らに……ああ、んんっ）

嫌悪感はずでに快感へと変わっていた。肉体は元より、精神的な快楽も覚えてしまっている。

それは、汚されるコトに対する被虐的な悦びであった。

男「さて。それじゃ、そろそろ本気で楽しませてもらおうか」

乱菊「はあ、はあ……もう、す、好きにすればいいじゃない……くっ」

男「はあ？ そこはそうじゃねえだろ？」

乱菊「は？」

男「あたしのマ●コに、ぶっといち●ポぶち込んでください、だろ！」

乱菊「ばっ、馬鹿なコトを……んんっ！ ああ、お、お尻は、やっ！」

男の舌が菊門をほじる。シワを押し開き、内部へと進入してくる舌の感覚に、乱菊は心を震わせる。

乱菊「つくは、はあ、はあ、あ……いい、そこ……んっく……いや、駄目、ああ」

男「ほら、もう欲しいんだろ？ 早く言えよ」

乱菊「うう……んん、いや……そんなこと……」

男「分からねえ女だなあ……ほらっ！」

乱菊「くっ、ひああっ！」

肛門を愛撫していた舌が、会陰を渡り膣口へと至った。

すでに濡れきっているその愛液を、男は音をたてて嘍り上げる。

男「じゅるっ、ちゅるるっ！」

乱菊「ひっ！ ふあっ、ひゃ……あああああああああああー！」

男「ほらほら、このトロトロまんこに、何を突っ込んで欲しいんだよ？」

乱菊「く……あ、あたしの……んん。あたしのあそこに……」

男「気持ちよくなりたいたいだろ？ なら、はつきりと言えよ！」

ヴヴヴヴヴッ！



乱菊「あっっー!! くっ、んうー!

いっ、言うわ。言うから、

振動、強く、しないで……

あ、来ちゃう、来ちゃうううっ!

男「早く聞かせてくれ。」

そのキレイなお口でよお」

乱菊「あ、あたし……

あたしの……っ」

男「なんだよ」

乱菊「あたしのマ●コに、

そのぶっといち●ポ

ぶち込んでえっー!!」

男「くははっ!」



「セフィリアリアークス……この世で最も強く、
気高く、そして美しい女……」
「こうでもしないとあなたと遊べませんかからね……ククク……」
「だ……誰ですか！あなた達は……？」
「さあ、みなさん。パーティーの始まりですよ」



「いやぁ……今日のご馳走は格別ですなぁ」
「く……あ……何を……」

仮面をつけた男たちが

ローションらしきものを塗りたくっていく。

「や……やめな……ささいー」

「さすがはセフィリアさま……」

こんな状況でそんな命令口調な女は
はじめてですぞ」

ただのローションではない、

強烈な催淫効果のあるローションだった。

はじめは冷静にこの状況を打開する策を

捜索していたセフィリアだったが

ズンツと頭に響く快楽が思考を

邪魔しはじめた。

「こ……これは……何……ああッー」

「足がピンとのびてますな……」

感じているのがまるわかりですぞ」

「そ……そんなッー！

か……感じてなど……う……ッー！」

「足のつま先まで反り返らせて……」

女が感じてる反応はこまかせませんなぁ」

「ち……っ……ちがいます……っーんッー！」



「どれ……ミニは念入りに塗っておきますか」

「や……やめ……うあああっ！」

怪しく光る乳房を優しくつかみながら
乳首の先端へとローションを塗り上げていく。
「いったいこれは……誰の……しわや……」

「ああっ！あああっ！」

「余計な心配はしなくていいんですよ」

「セフィリアさま」

「我々はただあなたの体で遊びたい……」

「ただそれだけなんですからね……ククク」

「ん……くっ……何を……！」

「ほくら立ってきた立ってきた」

「ひゃうううう！」



「さて……そろそろ「L」にき……」
「あああッー！」
ローションを粘膜に塗られると
性感帯をむき出しにされたかのように
感覚がするどくなっていた。
「ほほお……ヒクヒクしはじめましたな……」
「あのセフィリアさまがイク瞬間……
見てみたいですねあ」
「んっ……くっ……！そ……そんなこと……
私は決して……！」
「ここまでやったら
もうチヨイチヨイツと触っただけで……」
「なっ……や……やめっ……ああっ……くっ……うっ……ッー！」
（ダメッ……まさか……そんなっ……！）
「あああああああああああッー！」



「いつも凍としたセフィリアさまの
女としての本性を見れて最高ですな」
「はぁ……はぁ……はぁ……」
今度は拘束台の上半分がせり上がり、
イスのような状態になった。
「くっ……こんなこと……」
「いつまで続けるつもりですか……」
「ククク……いつまでも続けますよ……こ
こまでするのに随分お金が
かかりましたからね……」



すでに快感で震えている体にさらなる快感をひきずりだすためのバイブレーションが襲ってくる。

「うあああああああっ……ちよっ……待って……」

あああああああああっー！」

(ダメ……強すぎる……)

(これは……耐えられない……)快感を手えるためだけにつくられた玩具が

どうしようもないほどの淫撃をセフィリアの体に打ち込んでくる。

「やっ……やめっ……あああああっー」

も……もう……ダメ……あ

あああああああっー！」

(な……なぜ……)

(こんなことに……!?)

「それじゃあ入れますよ？」

いいですかセフィリアさま？」

「くっ……だ……ダメ……です……」

んんっーやめな……さい……!」

もう何も手を触れていなくても喘ぎ声をもらしてしまふほど体には快感が充満し、

頭が真っ白になっていた。

ズブッ……!

「あああああああああっー！」



「こんな状態でも
まだ『やめなさい』だなんて……
さすがはセフィリアさま。」
「それでこそ、
犯しがいがあるというもの……」
「ああっ……あっ……あああッ！
絶対に……んんっ！ゆる……
くううっ！……しま……せんッ
……あああッ！」
「まあ時間はありますから
ゆっくりと楽しんでくださいよ」
「私は三番目ですな」
「ははっ……すいませんね……
それではこのまま
ゆっくりじっくり……」
犯されている女の抗議など
まるで無視して
欲望を吐き出す順番の
確認をする男たち。
その余裕ぶりが
余計にセフィリアに
屈辱を与えた……
(ダメエ……こんな……
見知らぬ男性の……
モノなどで……私は……！)
「あああああああ
あああああああッ！」





目を覚ましたリナリーは上半身裸にされていた。
あわてて胸を隠そうとするが右手は背中に、
そして左手は左足に縛りつけられ
身動きがとれない。

(な……何？これは……?)

誰かが背後から寄ってきてそっと乳首を触る。

「やっ……誰？」

焦ったリナリーは立ち上がって逃げようとするが
片足を縛られた状態ではうまく立ち上がることもできず、
そのまま布団に倒れこんでしまった。





「くっ……」

「やみりナリー……僕が誰だか分かるかい？」

「だ……誰？あなは……？私をどうしようというの……？」

「やっぱり探索者の顔なんていちいち覚えてないか……」

でも僕はすっとりナリーのこと見てたよ。

すっとりナリーのこと想ってたんだ。」

「探索者（ファインダー）？教団の人間なの？」

「だって何でこんな……？」

「もちろんひどいことはしないよ……」

でも今日からはリナリーは僕のモノだ」

「な……何を……えっ……？やっ！」



「だ…ダメ…そんなところ…」
「ああ…やっとリナリーが僕のモノになる…」
リナリーの細く美しい曲線を描く。
脚を撫で回しながら股間に顔をうずめてくる。
「ダメ！おねがいーやめてー！こんなこと…こんなことしたって
私はあなたのモノになんかならないわ…」
「フフ…なるさ…してみせる…」
そういうと男はショートパンツをずらし指を入れてきた。



「はぁうっ！」

「知ってるよ……リナリーが男性経験がないってことさ……」

「……ううことされるの……初めてでしょ？」

「……っ！」

「大丈夫……僕ならリナリーを気持ちよくさせてあげられるよ。」

クチュクチュ

「あああっ！ちよっ……持って……ああっ！」

「ほらね……気持ちいいでしょ？ほらほら」

「ああっ！速う……ダメーお……おねがだから……もう……」

「そんなに気持ちいいのかい？じゃあもっとしてあげるよ」

「やっ……あああっ！」

（ダメ……この人……もう何を言っても……）



興奮してきた男はショートパンツをムリヤリ引きちぎり、腰を引き寄せ思うがままにリナリーの股間を弄び始めた。「あっ……あふう……やめっ……ああっ！」
「お尻の穴もキレイだね……想像したとおりだ……」
「えっ……何……！ あっ！ うああああっ！」
「反応は想像以上だ……」
敏感なんだねリナリー……フフフ」
「やぁーダメエ……！ 抜いて……！ あああっ！」
肛虚パイプを入れられたままクリトリスを優しくなでたりつまんだり……、リナリーの恥ずかしい地帯は見知らぬ男の欲望に完全に占領されてしまった。



「さあいよいよリナリーが
完全に僕のものになる瞬間だ……」
アナルにパイプを入れたまま
両足首をつかんで大きく開かせた。
「だ……ダメ……！ダメ！ダメ！」
（うそっ……イヤッ！誰か助けて！
誰か……！）
「ああああああっ！」



「ひとつになれてうれしいよリナリー…。リナリーも嬉しいだろ？」

「こ…こんな…ひどい…っ…ああっ！ああっ！」

「フフフ…僕無しじゃいられない体にしてあげるよ」

「ああっ！あっ！んっ！んんっ！ああっ！

ああああああああああああああああああっ！」









「くそっ…なんで私がこんな…」

「昨年の関東武学園新人武道大会

女子の部優勝者 白川渚ですー」

目を覚ますとそこは

見知らぬリングだった。

コスチュームも勝手に

着替えさせられていた。

目の前には柔道着を着た

大柄な男が立っている。

（何なの？）

ゴイツと戦ってことなの…？

私を見せモノにしようってわけ？

「レディー…ファイター！」

よく状況もつかめないまま

戦闘開始の掛け声がかけられる。

「うおお…ついにあの

白川渚とやれるぜ…」

（誰だか知らないけど

体が大きいだけの男になんか

負けないんだから…）



じりじりと間合いをつめてくる男。

構えをとる渚。

しかし渚はすぐに

体の異変に気づいた。

（か……体が……）

思うように動かない……！

それに……！

足を動かすたびに股間が疼き、

思わず座り込んでしまいたく

なるほどの淫悦が下半身から

後頭部へと襲い掛かってきた。

（くっ……なに……あッ！）

渚が一人で自分自身で

生み出した快感と

戦っている隙に

男は後ろへまわりこみ、

そして胸と股間を

同時に押さえつける。

「ちよっ……う……ああっ！」

「どうだ？」

気持ちよくなってきたか？

何もできないだろ？」

「く……うっ……くそっ……何か……

したわね……アンタ……ああ！」

「ひっ……あっ……んっ……んんっ……

あっ……く……うううう……

ううー！ああっ！」



そのままテイクダウンされてしまう渚。
いやテイクダウンというよりもむしろ快感に
ガマンできず自らしゃがみこんでしまったと
言ったほうが正しかったかもしれない。
「おやぁ？グラウンドにもちこんでもいいのかなぁ？」
（くぅ……まずい……はやくっ……立ち上がらないと……）
「んっ……あっ！やめっ……あぁっ……ッ……あぁっ！」
男は要所要所で渚の感じる部分を触って体をビクつかせ、
徐々に優位なポジションに移行していった。
寝技の技術ではなく淫らな指戯によって
グラウンドをコントロールされていた。
そしてついにサイドポジションにつかれてしまう。
通常の状態の渚なら連駆を使って男を跳ね飛ばすことも
できたであろうが、こんなに感じる体にされてしまっている
今の渚には厳密で正確な動きを必要とする連駆は不可能であった。
「く……そお……やめろ……んんっ！くぅ……！」
「あっ……やめっ……ダメッ！ダメッ！あぁあぁっ！」







サクラ「ん、んん……」

シズネ「あら、ようやくお目覚め？」

サクラ「え、シズネさん？ な、なによこれー？ 動けない……っく」

シズネ「ふふふ」

妖しげな笑みをこぼすシズネに、サクラは自分の裸体を確認する。

縛られているわけでもないのに身体の自由が利かない。それは、シズネの忍術によるものだろうと容易に想像できた。

サクラ「いったい、これは何なんですかー？ シズネさんっ」

シズネ「けたたましい子ね……少しくらいおびえて見せてくれたっていいのに」

サクラ「おびえ？ なんてそんな……それより、身体を自由にしてください！」

シズネ「あら、駄目に決まってるじゃない」

サクラ「え？ な、なんで……きやっ？」

シズネが掴んでいたもの。それは、サクラの陰部から生えた男根であった。

サクラ「何よこれ？ う、嘘……おちんちん生えてる？ くうう！」

シズネ「やっと気付いたの？ 状況確認の遅さは、忍にとって致命的よ」

サクラ「やっ、なんでー？ か、感触があるー？ ああああっ！」

ちようと陰核の部分から生えた男根。シズネはくすくすと笑いながら、それを抜き上げた。

サクラ「あ、やっ、なに？ なによこれえ……ああっ！」

シズネ「あらあら、もう感じてるの？ 節操のないチンポだこと」

サクラ「うき、い、弄らないで……っく！ な、なんでこんなことー？」

シズネ「だって、サクラ？ あなた最近生意気じゃない？」

サクラ「え？ ……あっ！ 痛いっ！」

握り潰しかねない勢いでペニスを掴むシズネ。その力に、声に、どす黒い感情が込められていた。

シズネ「綱手様の弟子にしてもらえたからって、いい気になってるでしょう？」

サクラ「そ、そんなことないわよ」

シズネ「いいえ。ちよつとくらい目をかけてもらえたからって調子に乗って……おいたが過ぎる後輩には、先輩からの愛の鞭が必要だと思わない？」

サクラ「だからって……あ、いやー」

シズネ「言っても分からない子には、身体で分からせてあげないとね……ふふふっ」

いやらしく笑い、握ったペニスを上下に激しく扱く。

身体は動かせないのに、性感だけはあつことがひどく悩ましい。

それどころか、触れられるだけで官能の刺激が走る状態に、サクラは恐怖さえ覚えていた。

サクラ「やっ、やっ！ そんなに擦られたらっ！」

シズネ「擦られたら、なに？ そんな簡単には楽にしてあげないわよ」

サクラ「あああ、や、やめて……おかしくなっちゃう、うう、つく！」

ただ擦るだけではない。幹は痛みを伴うように擦り、空いた手で亀頭を揉みほぐす。

これまで感じたことのない衝撃に、サクラはただ悲鳴をあげることでしかできなかつた。

シズネ「ちょっと弄っただけでこんなに腫らして……生意気なだけじゃなくて、淫乱なのね」

サクラ「違っ……ああ、やめて、お願い……シズネ、ああ、っくあ！」

シズネ「もうこんなに先走りが出るわよう？ これが淫乱の証じゃなくなつてなんなの？」

サクラ「だって、私こんなことされたら……あ、あ、駄目！ 感じて……あゝ！」

シズネ「ふんっ」



背後からサクラの首元にかじりつく。
嘔み切らないよう、しかし痛みを伴うよう、
細心の注意を払っていた。ぶる。

当然ベニスへの攻撃も忘れない。

徐々に高まっていくサクラの声に、
嫌悪と官能を同時に覚えるシズネ。

サクラ「ひゃあ、いっ、いやっ！」

そんなに強く握らないでっ、ひっ、あああ」
シズネ「ふふっ、パンパンに腫れ上がってる。

ほら、もう限界じゃない？」

サクラ「はあ、はあ、っくあー やっ！」

来る、なにか来るっ！」

シズネ「射精よ。ちゃんと精液も

出るように仕込んでおいて

あげたんだから、感謝しなさい」

サクラ「しゃ、射精！？」

そんなの知らない。私、そんなの……

あ、あ、あ、あああ！」

シズネ「ほらほらー！ まずはー発目っ！」

サクラ「あーっ！ あああっ、

っだ、駄目とえええっ！」

ビュッビュルッ！」

サクラ「きゃああっ！」

ひゃっ、くああああああああああああっ！」

サクラの中で、快感の塊が爆発した。

それが瞬時に外へと噴き出されていく。

サクラ「ああ、射精してる……

私、射精してるう……っううう」

シズネ「ホント。凄いいしっぶりね、

忍耐だけじゃなくてそっちの才能も

あるんじゃないの？」

サクラ「うう……ち、違うわ……

そんなの、あるわけ……」

シズネ「へえ、そう？ ふふふふふふ」

嫌味だったらしいシズネの笑いに心がひどく傷つけられる。

サクラは羞恥心と脱力感に苛まれたつちも、なんとかシズネから逃げたそうと身体をよじった。

サクラ(駄目……やっぱり動けない。すごい威力の金縛りだわ)

シズネ(それにしても、たくさん出したわねえ。ベッドが汚れちゃったじゃない)

サクラ(……っく、はぁ、はぁ、あぁ……も、もういいでしょう?)

シズネ(馬鹿なこと言わないで? まだ始まったばかりよ)

サクラ(え?)

シズネ(ふふ……影分身っ!)

シズネの分身がサクラの股を押し開き、

白濁を垂らしたままのペニスにしゃぶりついた。

サクラ(きゃっ!? あっ、いやっ、いやぁ!)

シズネ(ほら、まだまだこんなな

元氣じゃない……べろっ、じゅるん)

サクラ(ひっ! な、紙めないでっ、

今、快感すぎてっ、っくう!)

シズネ(じゅるるっ、ちゅっ……じゅぶっじゅぶっ)

サクラ(ひいっ! いっ……あぁあ、駄目!

きつい、刺激強すぎいいっ!)

シズネ(んふふっ……じゅるる、

ちゅぶちゅぶ、じゅぶっ! んっ、んっ!

サクラ(あぁ、あぁ、あぁ、あぁ……っ!

すごい、おっ、奥まで入っていくっ!

根本まで呑み込んだかと思うと、

今度は力りばかりを舐め回すシズネ。

そしてまたすぐに根本まで唾え込んだり、

頭を上下に揺すって抜いたり。

サクラ(くふぁ、あ、あっ、すっ、口で

……、口で感じさせられてるうう)

シズネ(……っふはー サクラ、震えてるわよ?

ちよっと感じすぎなんじゃないの?)

サクラ(だ、だってこんなー あぁ、だ、駄目。

本当に感じすぎちゃっうう……んっ)

シズネ(いやらしい……こんなのが綱手様の

弟子だなんて信じられないわ)

サクラ(はぁ、はぁ、っくー うう、

いや、いやぁ……もうこれ以上舐めないで)

シズネ(はしたないおねだりね。

私の口じゃ、気持ちよくないうってこと?)





シズネの片割れがベッドを下り、口淫からまた手淫へと切り替える。

シズネ「それじゃお望み通りに、手で扱きまくってあげるわ。ほら、ほらっ！」
サクラ「んぐっ！ うっ！ ひあっ、違っ……ひて、あああっ！」

シズネ「いい手触りだわ。このまま握りつぶしてあげようかしら……べろんっ」
手で扱きながらも、亀頭を絞めるのも忘れない。だらだらと

溢れ出す先走りを吸り取ると、動けないはずの腰が跳ね上がった。
サクラ「ひやめっ、ああ、くー！ いや、やめて……ああ、お願ひ……っふああ」

シズネ「あら。乱暴にされて感じてるの？ いやらしい……っふふっ」
サクラ「あうっ、ふっ、んううう！ はあ、はあ、はあ、あああ」

シズネ「そうそう。おっぱいも背めてあげないと寂しいでしょう……ほらっ！」
横たえてもツンと上を向いたままの乳房をシズネの片割れが攻め立てた。

乳首を摘み、乳房を荒々しく揉み上げる。
サクラ「ひいっ！ お、胸は、いや……あああ、駄目。そんなに揉まないでよ」

シズネ「ふふ……小振りだけど、張りもツヤもいいわね。憎たらしいこと」
サクラ「んああっ！ つっ、抓らないでっ、痛い、いっ……んんっ！」

シズネ「それじゃあ、こっちも」
サクラ「きゃあっ！」

カ리를 抓り、また扱く。尿道口に指を突き込み、
ほじくるように撫でつける。

シズネたちの容赦のない攻めに、サクラはまた腰が破裂するような
昂ぶりを覚えた。

サクラ「ああ、駄目、また来るっ、出ちやう、出ちやううううっ！」
シズネ「早いわね。もう2発目？」

シズネ「犯されて感じるなんて、なんてはしたない妹弟子なのかしら」
サクラ「違……ああ、ちっ、違うのっ！」

シズネ「違わないわ、この淫乱！」
シズネ「姉弟子に口答えるから生意気だって言ってるのよ！」

サクラ「ひやっ、うあ、はっ！ イく、イっちやっ、あ、あ、あああっ！」
ピュクッ、ピュクッ！

サクラ「でっ、出ちやううう！ くうっ、うっ……んううううう！」
シズネ「ふふふ、出た出たっ。汚いのがいっぱいっ」

シズネ「凄い射精っぷりね……ほんと、淫乱な子だわ」
サクラ「は、はあ、はあ、ああ、出た……また、こんなにいっぱい……ああ」

噴き出した精液が自らの腹や胸に飛び散る。
およそ尋常とは言えないほど大量の白濁に、サクラは思わず息を呑んだ。

サクラ「うう……わ、私、もう……」
シズネ「まだよ。次の3発目は3人目で出させてあげる」
サクラ「ゆ、許して……私、ほんとにもう……あっ！ ふあああああ……」

3体になったシズネが、サクラの性感帯をすべりて攻め立てた。

背後から胸を揉みしだき、赤黒く腫れ上がったペニスを咥え、濡れそぼった女陰を指でほじくる。

サクラ「いや、ひっ、ひゃはっ、あ、ああー 壊れる、壊れちゃうっ！」

シズネ「見て？ 乳首をこんなに勃起させて…… 摘みやすいたららないわ」

サクラ「あぐっー ひゃめっ、と、取れひゃうっー！」

シズネ「小さいなりに可愛らしいじゃない……ほんと、憎たらしいっ！」

サクラ「ひいつっー 痛い痛いっー ああ、ひゃっ、んあああー！」

乳首を摘んで引張る。ピンと張った乳房から、苦痛を糧とした快楽が湧き上がる。

ペニスから伝わる快感は鮮烈だが、腹に埋められた指から身えられる悦楽も並のものではなかった。

ちようどペニスの裏側にあるざらついた腹壁を、シズネは執拗に擦り回した。そこは、腹内で最高の刺激が得られる場所のひとつ。

シズネ「ほら、こんなにぐちゃぐちゃと汚らしい音立てて…… 犯されてるクセに、よくもまあこれだけ濡らすことができるわね」

シズネ「気持ちよければ何でもいいんじゃないの？ ホント、淫乱な小娘だわ」

シズネ「あら、それじゃあお仕置きにならないじゃない、ふふふっ」

サクラ「だ、駄目。もう、許して……お願いだから、ああ……んあ、ひいつー！」

シズネ「それでも詫びの言葉はないのね…… 大したタマだわ」

サクラ「あっ！ い、言いますー！ こめんささい、こめんささい許してくださいっ！」

シズネ「なあにその言い方。誠意ってものを知らないの？」

シズネ「そんなことじゃ、許してあげるわけにはいかないわね」

サクラ「そんな……わ、私、もう……っ！」

サクラのうちに込み上げてくる官能の爆発を、シズネたちが見逃すはずはなかった。

サクラ「はあ、はあ、はあ、だ、駄目、また、ああ、そんな……っくうー！」

シズネ「ほーら、もう3発目よ？ 泳手にイくがいいわっ！」

サクラ「イくっ、うっー！ またイっちゃうっ、精液出ちゃううううううー！」

ピクマ、ピククンッッー！

シズネ「んう……んっんっんっ……こくんっ、ちゅっっ！」

サクラ「ひゃはっー きゃっ、ひあああああああああー！」

射精の衝撃がサクラの心までも弾けさせる。

シズネたちはそんな少女を、舌なめずりしながら眺めた。

サクラ「ふあ……は、ああ……出てる。シズネさんの口の中に、精液、いっばい……」

シズネ「じゅるる、ちゅっっ、んっ……じゅるるんっ！」

サクラ「駄目、そ、そんなに吸い取らないで……はあ、はあ……」

シズネ「ふ……なかなか濃厚でいい味だわ、ふふ」

ぐったりとしたサクラを見下ろした3体のシズネが、分身を解いて一人に戻る。

サクラ「はあ、はあ、はあ、はあ……」







シズネ「さて。それじゃあ次は私の番よね？」
サクラ「え？　そ、それは……そんなー」

服を脱いだシズネの股間には、

サクラと同じように男根が生えていた。

それはサクラのモノの2倍はあるうかという巨根。

シズネ「あなたのおマンコ使ってあげる。光榮に思うのね」

サクラ「うあ、ああ……いや、いや……」

んぐっー　くうううー！

逃げ出すことのできないサクラの腰を持ち上げ、

ゆっくりと押し込んでいく。

膣壁のシワヒダ一本一本を数えるかのような挿入に、

サクラは悦びの声を押し殺す。

シズネ「ふふふ……何度もイってるから、膣内がキツイわ」

サクラ「くうう、はっ、入る……シズネさんのすこいの

、入ってくるうううー！

シズネ「奥までいくわよ……ほらー　ほらっー」

サクラ「あ、っ、くー　駄目っ、そんなに、突っ込まないでっー」

そして最後に、その凶器のような（ニス）を力任せに押し込む。

行きついたところは膣最奥の壁であった。

サクラ「うあ、あ、来てる。

子宮のトコまで来てるうう……ううううううー！

シズネ「狭くてキツくて……なかなかの名器よ。

だから、たっぷりとほじくって、

妊娠するまで中出ししてあげるっー」

サクラ「いやっ、きゃああああああああー！

子宮口を叩き付けるようなストロークに、

サクラ「いやっ、いやあぁ！　やめて、もう許してよっー！

シズネ「馬鹿言わないで。簡単に許したら、

お仕置きだなんて言えないで……しよっー」

サクラ「ひいっー　だっ、駄目。奥、そんなに、

突かないで……んぐっー！

シズネ「イヤなら逃げればいいじゃない……あははっー

動けばだけどー！

サクラ「んぐっ、くうううー　こっ、壊れちゃう……

おま●こ壊れちゃうううー！

シズネ「いいわよ……壊れちゃいなさい」



サクラの苦悶の表情に、シズネは嗜虐的な笑みを浮かべた。そして身体を持ち上げ、今度は強く突き上げる。子宮口を押し込むようなその行為に、サクラはまた強く嘔ぐ。

サクラ「あぐっ、くうー！ ひゃめっ、だっ、駄目え……！ イくっ、またイくううー！」

シズネ「そうね。私もイくわ…… たっぷりと出してあげるっ！」

サクラ「いやっ、中は、中は駄目え…… ああああ、駄目、ためよええっ！」

シズネ「締まる締まるっ！ いいわ、最高のマ●コよー！」

サクラ「ひっっー！」

ドクンッー！

サクラ「んあっ！ きゃあああああああー！」

シズネ「んっ、んっ！ いいっ、出てる！ ほら、中で出てるの分かるでしょう？」

ドブス、ビュルルッー！

サクラ「あぁっ！ 熱っ、うっ！ 出てる、中で出てるううううー！」

シズネ「いい……いいわ。サクラのおマ●コ、最高……ふっふっ」

サクラ「だ、駄目……出しちゃ駄目って、言ったのに……あぁ」

シズネ「ふふふ……可愛いわよ、サクラ。もっともっと、可愛がってあげるわ」

そしてシズネはまた影分身を作り上げる。

シズネ「代わる代わる、永遠に犯し続けてあげるわ」

サクラ「んあ……」

それが、サクラの覚えている最後の理性的な言葉であった。





